



讀光譜

宇都宮義真撮影

石工



病者のなげき

現代医学は進歩せり、発達せりと、毎日、新聞やラジオは報道している。現代医学に用のない健康者は、それをそのまま信じている。しかし、自分自身が運悪く病気になると、その信仰も忽ち崩れ、治るものなら迷信にでも走りたくなる。世の中に一人位、病気を治してくれる医者は居ないものかと思うようになる。

神経痛やリウマチの病人が、大病院をうらめしそうに眺めて、ハリやキュウや温泉や神様を求めて右往左往している。しかし、彼らが何故、至れり尽くせりの設備を誇る病院に行かないで、他の治療に救いを求めるのか、愚かなことと笑うことは出来ない。彼らは病院の医療の経験者であり、かつ実証主義者なのである。

医は即ち薬

アメリカの視察団が日本に来て、「日本では医者が薬を売り、歯医者が金を売り、薬屋が化粧品を売っている」と驚いたそうである。日本人の薬好きに便乗した日本の医者の薬の飲ませ好

きもこじらに原因がありそうである。そこで、遅咲きながら、先进国を見習つて、日本でも医薬分業作業に取り組むことになつた。

そして、一口に医薬分業法案と呼ばれた諸法案が今国会を通じて、昭和30年から実施される。しかし、政府原案は医師会の反対で全く骨抜きにされ、「医師は患者に悪影響がある時と患者が希望する時は、処方箋を出さずには調剤してよい」ことに決まったのである。これでは今まで騒いだのが馬鹿くさい位で、医薬分業に似て非なるものと言わざるをえない。全く日暮れて道遠しの感がある。

「医は即ち薬」の現状から見れば、医師の生活権もあり当分は已むを得ないことも知れない。医師が胃腸病に胃腸薬を、高血圧症に降圧剤を飲ませれば万事こと足りりと考えている間は無駄である。しかし、医師が薬物療法一点張りから抜け出で、生活環境を重視した医学に目覚めれば、医薬分業問題も自ずと解決されるであろう。

百年後の医学

一七九三年に当時のアメリカの首都フィラデルフィアで黄熱病の大いなる感謝をうけたが、黄熱病がエジプト蚊によって媒介さ

きもこじらに原因がありそうである。そこで、遅咲きながら、先进国を見習つて、日本でも医

薬分業作業に取り組むことになつた。

当時の医学者たちは、病気が蔓延するのを防ぐために、毎日、市場に軍隊を繰り出して大砲を

発射させ、また罹病した患者の治療には、糖蜜やニンニクを飲ませたり、強烈な下剤を与えた

過失、昭和30年から実施される。

しかし、政府原案は医師会の反対で全く骨抜きにされ、「医師

は患者に悪影響がある時と患者が希望する時は、処方箋を出さずには調剤してよい」ことに決ま

ったのである。これでは今まで騒いだのが馬鹿くさい位で、医

薬分業に似て非なるものと言わざるをえない。全く日暮れて道

遠しの感がある。

「医は即ち薬」の背後には

違法がある。Back of every

physical ailment, there is a broken law. と言われるが、

患者の背後にある生活を含めて診断し治療する心眼を持たない

と、應々にして病気の本体を取り逃がすことになる。病気の背

後に自然に反する生活があるなら、自然に帰ることが最も合理的な治療法になるのである。こ

の点から、光線療法の合理性を強調したい。

翻つて、百年後の人々は、

物療法（多くは対症療法）に偏

した現代医学を果たしてどう評価するだろうか。

病者のなげき

宇都宮 義真

「健康と光線」

昭和25年8月25日発行
健康闇話 一百年後の医学

昭和26年4月15日発行
健康闇話 一百年後の医学

昭和26年6月25日発行
是々非々 一医は即ち薬一

昭和26年8月25日発行
是々非々 一病者のなげき一

より要約した。

病の大流行があり、五万人の人口の内五千人が死亡した。これで、伝染病であることが明らかにされている今から考へると、随分おかしな話である。しかも、医学史を紐解くまでもなく、このような過ちは何時の時代にも見られるのである。

ところで、病気の背後には違法がある。Back of every physical ailment, there is a broken law. と言われるが、

患者の背後にある生活を含めて診断し治療する心眼を持たない

と、應々にして病気の本体を取り逃がすことになる。病気の背

後に自然に反する生活があるなら、自然に帰ることが最も合理的な治療法になるのである。こ

の点から、光線療法の合理性を強調したい。

翻つて、百年後の人々は、

物療法（多くは対症療法）に偏

した現代医学を果たしてどう評価するだろうか。

(二) れまで、視点をかえて、ビタミンDとカルシウムは密接不可欠な関係にあることを記

点は、カルシウムの不足が強調されている割に、ビタミンDの欠乏が軽んじられていることがあります。換言すれば、前回述べたように、カルシウムの摂取量は

食事の質の向上によりほぼ満足できる状態に近づいており、加えて、一般的の関心が高まっていくことからこれからも一層増えると予測されるのに対し、ビタミンDは人々の暮らしと光線と疎遠になつたため既に欠乏気味であり、これからも不足は加速すると推測されるにも拘らず、ビタミンDについては無関心な人の多いことである。

(ビ) タミンDが欠乏すると、カルシウムの摂取量は十分でも、吸収も利用もされないためカルシウム不足を来すのである。このビタミンDは、屋外の光線を浴びれば簡単に生成されるが、食事で補うことは極めて難しいため、日常生活が屋内に限られている人では容易に欠乏する。

体質（抗原に対する抗体を生成する免疫応答の調節機構・内

る患者を救い、今後の患者の増加に歯止めをかけることが出来

異物に対する免疫応答を調節するリンパ球のT細胞への分化を

それは必ずや期待した以上の效 果を体験できる筈である。

このビタミンDは、屋外の光線を浴びれば簡単に生成されるが、食事で補うことは極めて難しいため、日常生活が屋内に限られている人では容易に欠乏する。然るに、多くの人は、カルシウム不足の原因をカルシウム摂取

例外なく増えており、今や日本人の三人に一人はアレルギー体質といわれるほどになった。しかし、アレルギーの原因（抗原として作用する・外因）とされているものは大昔からあったのであり、この点から、日本人の

(二)のようアレルギーを起こす外因を避けるだけでこと足れりとせず、どうして日本人の体質(内因)が変わったかを解明してこそ、現に苦しんでい

能性を考慮しなければならぬ。
い。

これまで光線療法でいろいろなアレルギー性疾患の治療を行った経験から顕著な効果が裏付けられているので、光線療法を軽くするだけでおよしとするのはなしに、体質から治す必要がある。

(E) タミンDが欠乏すると、カルシウムの摂取量は十分でも、吸収も利用もされないためカルシウム不足を来すのである。

られたり、引つ切り無しに
くしゃみに悩まされる人が
急増している。加えて、花
粉症のみならず、所謂アレ
ルギー性疾患に罹病する患者は

ビタ

マクロフ
医

ミンDは人々の暮らしが光線と疎遠になつたため既に欠乏気味であり、これからも不足は加速すると推測されるにも拘らず、ビタミンDについては無関心な人の多いことである。

相俟つて深く係わっている
ことが明らかにされた。
×
×
×

```

graph TD
    A[ビタミンDの作用] --> B[その 36]
    A --> C[ミンDの免疫系に及ぼす]
    C --> D[遅延型過敏性反応]
    C --> E[細胞障害性]
    C --> F[ナチュラルキラー細胞]
    C --> G[サプレッサーT細胞]
  
```

(二)これまで、視点をかえて、ビタミンDとカルシウムは密接不可欠な関係にあることを記載してきたが、特に注意すべき点は、カルシウムの不足が強調されている割に、ビタミンDの欠乏が軽んじられていることがある。換言すれば、前回述べたように、カルシウムの摂取量は食事の質の向上によりほぼ満足できる状態に近づいており、加えて、一般の関心が高まっていることからこれからも一層増えることと予測されるのに對して、ビタミンDとカルシウムは即ちビタミンDの欠乏を重視しなければならないことを指摘したい。

× × ×

因)が変わったと考へざるを得ないのであるが、原因の究明にしても、単にアレルギーを起こす外因の調査研究をするだけでアレルギー体質になった患者側の内因の変化については、全く未解決なまま放置されている。また、治療面で最も重視されることは、外因(抗原)を避けることで、あくまでも一時凌ぎ

るるのである。この体質の変化の一因に、光線の不足が関係している可能性がある。

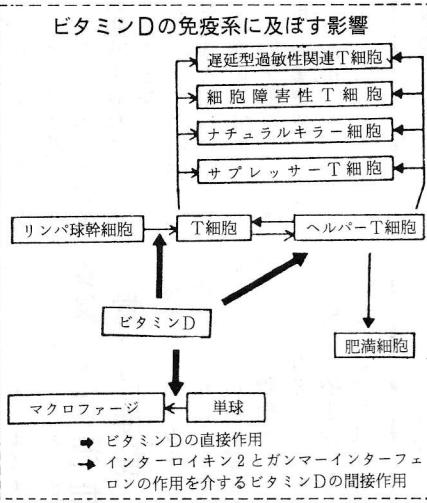
T細胞に直接作用してインターロイキン2やガンマ-インターフェロンを産生し、免疫応答を正しく調節する上で不可欠な作用を営んでいるのである。

一方、カルシウムの不足は、過剰な骨吸収を起こし、その結果、細胞内のカルシウム濃度を増し細胞の機能を阻害するが、免疫系では免疫を担当している。

應用光線魔法學 (39)

□ ビタミンDの作用 □

その 36



医学博士
宇都宮 光 明

太陽と親しもう、

サナモア中央診療所

医学博士 宇都宮

光明

夏には、ついこのあいだまで、誰もが喜々として日光浴を楽しんでいました。素肌に一杯の太陽を浴びることによって、食べ物では不足がちなビタミンDを補うだけでなく、体内に十分なビタミンDを蓄えて冬に備えたものです。

しかし、既に五・六年になりますが、化粧品メーカーが紫外線防止化粧品を売らんがため、直に太陽光線を浴びるとシミになる」と、脅かしとしか思えないキャンペーンを大々的に始めてから、特に女性で健康を保つ上で生理的に必要な最小限の光線を浴びることさえ怖がる人がいます。でも、太陽の大恩を忘れるなら、自分自身をないがしろにしているだけなく、人類の未来に禍根を残すことになりかねません。

太陽があればこそ地球の生態系は存在するのであり、私たちにとって太陽光線は欠かせません。光線医学の先覚者スコットは、「Light equals Vitamine D.」と、昔と比べて太陽と疎遠になつた今こそ、この言葉の持つ重みを再認識することが求められています。然るに、医学界をも含めて、光線の作用について無関心に過ぎます。この点を最近の新聞報道から検証してみました。

大腸ガンの罹病率

— 日照の違いが原因? —

我が国の大腸ガンの患者は猛烈な勢いで増え続けていますが、厚生省は地域別(地理病理学的)に調べた結果を報じていますが、厚生省は地域別(地理病理学的)

る文明病で、食事性線維が予防に有効とされていましたが、食事の違いでは罹病率の地域差を説明することができません。

ところで、読者の中に、



海道など北部で高く、沖縄、九研究の切掛けは、アメリカ

全国的に食事の内容が酷似していることを明らかにし、罹病率の違いを食事で説明できないことから、日照の差に着目し、日照の違いが大腸ガン、乳ガンの罹病率に関連していることを明らかにしました(光線療法学318頁、健康と光線・昭和58年10月1日「光線浴にがん予防効果」、昭和63年7月1日、昭和63年10月1日「乳ガン・結腸ガンを防ぐ」参照)。

ここでガーランドの報告の要旨を簡略に述べますと、太陽光線を浴びる機会が少ないと必然的にビタミンD欠乏状態を起こすため、カルシウムを摂つても吸収されず、カルシウムが不足する結果、大腸ガンに罹病する危険性が増すことを、臨床的な観察で実験的に明らかにしたのです。換言すれば、ビタミンDとカルシウムに大腸ガンを予防する効果(ガン一次予防)のあることを立証したのです。

然るに、筆者が入手し得た新聞報道の範囲では、コメントしているガンの権威者や厚生省の担当官は、アメリカを始め世界で高い評価を受けているガーランドの研究に一言も触れていません。その理由は明らかではありません。その理由は明らかではありません(無視したのか無知なのが)が、光線を軽んじる傾向を垣間見る思いがして残念でなりません。しかし、大腸ガンの危険因子について、我が国に於

皮膚ガンの原因

— 紫外線防止基礎化粧品が関係? —

平成2年12月27日の朝日新聞は、資生堂が販売している紫外線防止基礎化粧品に含まれているウロカニン酸に皮膚ガンを促進する可能性があるとの研究が日本でもサンオイルやファンデーションに広く使われています。これに対して資生堂は、「現地の他のメーカーと歩調を合わせ販売を中止したが、今の段階では安全性に疑いはない。日本での回収はかえって消費者の不安全を招く」と、販売を続ける方針を明らかにしています。しかし、既に本紙に記述した(健康と光線・昭和60年7月1日「サンオイルファンデーションでマークアップをご注意」)と光線・昭和60年7月1日「サン

（6面へつづく）

